2023年3月5日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

裁くな、生きよ！

［ルカによる福音書18章1～8節］

「イエスは、気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるために、弟子たちにたとえを話された。「ある町に、神を畏れず人を人とも思わない裁判官がいた。ところが、その町に一人のやもめがいて、裁判官のところに来ては、『相手を裁いて、わたしを守ってください』と言っていた。裁判官は、しばらくの間は取り合おうとしなかった。しかし、その後に考えた。『自分は神など畏れないし、人を人とも思わない。しかし、あのやもめは、うるさくてかなわないから、彼女のために裁判をしてやろう。さもないと、ひっきりなしにやって来て、わたしをさんざんな目に遭わすにちがいない。』」それから、主は言われた。「この不正な裁判官の言いぐさを聞きなさい。まして神は、昼も夜も叫び求めている選ばれた人たちのために裁きを行わずに、彼らをいつまでもほうっておかれることがあろうか。言っておくが、神は速やかに裁いてくださる。しかし、人の子が来るとき、果たして地上に信仰を見いだすだろうか。」

［1］　「絶望的状況」がやって来て

今日読んで頂いた主イエス様の譬えには酷い裁判官が登場してきます。困っている人の訴えを全く聞こうともしない裁判官です。しかしこの裁判官が、今までの自分の態度を翻して、ひとりのやもめ（未亡人）の訴えを聞いてあげるようになった、という話です。しかもその理由は、何度も何度も来られたらうるさくてかなわないから、というとても褒められない理由からです。エッ？ってちょっと思わせるような、少しイエス様のユーモアさえ感じる話です。イエス様はここでどのようなことを私たちに伝えたいと思っておられるのでしょうか？

18章1節には、この福音書記者（ルカ）が、その目的について既に書いています。「イエスは、気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるために、弟子たちにたとえを話された」と。「気を落とさずに祈りなさい」。‟気を落とさないで”というのがいいですね。他の訳では「失望せずに」というのもあります。つまり「気を落とすこと」とか「失望する」ということと、「祈る」ということが対比しているのです。「気を落とすこと」とか「失望する」という言葉の反対語は、「祈る」ということ、それをこの譬え話は語ってくれているように思います。

この譬え話はユーモラスな面も確かにあると思いますけれども、改めて読んでみると結構絶望的と言って良いようなことが語られていると思うのです。2節にこうあります。「ある町に、神を畏れず人を人とも思わない裁判官がいた」。これは困ります。まあ、神様を恐れない裁判官はいると思います。有能な裁判官は自分の正義感や、キャリアなどを神様のようにしていて、神様は不要だと思ってしまう人は多くいるでしょう。しかしその後にある「人を人とも思わない」、これは裁判官としてまずいと思います。法に則って困った状況の中にある人のために正しい裁きをするというのが裁判官の務めの筈なのに「人を人とも思わない」のですから。このやもめが置かれている状況は絶望的と言って良いと思います。

そう、私は今「絶望的」と言いましたけれども、恐らくイエス様は、そんな「絶望的状況」を強調するためにこの酷い裁判官を設定したのだと思います。私たちにも、「泣きっ面に蜂」とか、これまで回っていた歯車が突如噛み合わなくなるような、何故こんなに予期しないことばかり起こるのですか？と言いたくなるようなことがありますよね。もう、どん詰まりのような状況に置かれるということです。この未亡人の女性にとって、今状況は最悪です。追い詰められているのに、そして、何とかして欲しいと願うのですけれども、頼りの筈の裁判官がダメダメな裁判官なのですから。

［2］ 「絶望」の只中で

聖書の中で（新約聖書の中で）「絶望的状況」に陥った代表的人物は恐らく12弟子のひとりのユダだろうと思います。イスカリオテのユダ。彼は最後、自分で自分を裁いてしまいましたね。今日、この礼拝の中で「主の晩餐式」も執り行いますけれども、聖書の最後の晩餐の記事の中で、例えばマタイによる福音書の中にこんな激しいイエス様の言葉があります。26章24節です。「人の子は聖書に書いてあるとおりに、去って行く。だが、人の子を裏切る者は不幸だ。生まれなかった方が、その者のためによかった。」これは私は、聖書の中で一番戸惑わせる言葉ではないかと思います。イエス様が「生まれなかった方がその者のために良かった」などと言っているのです。私はこれは大変キツイ言葉だとずっと思って来ました。このようなことをイエス様に言って頂きたくないと。ユダよ、お前はとんでもない奴だと断罪しているように聞こえてしまっていたのです。けれども今は、そうではないのではないかと思っています。「生まれなかった方があなたのために良かった」。これは、ユダのためにイエス様がどれだけ心を動かされていることか、もっと言えば慟哭のような言葉のように思えてきました。「ユダよ、お前は何を考えているのか？お前の人生、そんなことで終わって良いのか？私から離れてどこへいこうとしているのか？そっちへ行くな」と、深い悲しみの中で呼びかけていたのではないかと私は思うのです。決して断罪ではないように私は思うのです。

デンマークの哲学者キルケゴールは「絶望とは、‟死に至る病”である」と言いました。本当にそうではないでしょうか？ユダは確かに主イエスを裏切りました。しかし裏切ったのはペトロもそうです。他の弟子たちも皆イエスの許から逃げ出してしまったのです。皆、イエス様に合わせる顔がなかった。絶望の淵というものを皆が経験したと言って良いでしょう。しかしユダだけは、自分で自分が許せなくなって、自らに死を与え、自分を裁いてしまったのです。イエス様はユダにそうなって欲しくなかった。それがあの主の言葉になったのではないでしょうか。では、ユダはどうしたら良かったのでしょうか？ユダの話というのが聖書に書かれている、それはとても大事だと思います。決して他人事とは思えないのです。キルケゴールは『死に至る病』の中でこのようなことを書いているのです。

“人間とは、絶望の中に落ち込む存在であり、そういう必然性を持っている”と。そして彼は「絶望」に抗う言葉として、「可能性」ということを言います。絶望しないで、可能性を用いよ、と言います。「可能性を用いないと言うことは、黙っているようなものだ。」「宿命論者は絶望しており、神を失い、従って、自分を失っている。神を持たない者はまた自己を持たないからである。」そして、「決定的なことは、神にとっては一切が可能だ、ということである。神には何でも出来ないことはない。神を必然性の神にするな。」「信じる者は、人間的に言えば、自分の身に降りかかってきたことのうちに、或いは自分が敢えてしたことのうちに自分の破滅を見、かつ悟る。しかし、彼は信じる。それだから彼は破滅しない。信じる者は、自分がいかにして救われるかということはこれを全く神に委ね、そして神にとっては一切が可能であるということを信じるのである」。

［3］　逞しく主を信頼し、自分を裁くな

イエス様の譬え話に戻りますと、このやもめは、正に自分の置かれた絶望的状況の中で、しかしそれを「必然的なことだから」と宿命論に陥っていないのです。救いを諦めてはいません。あのボルダリング（クライミング）ではありませんが、自分が掴めそうなでっぱり（突起物）があればそれを握って、神様が開いて下さる可能性を信じて委ね、前に進んでいるのです。それが「祈り」ですね。そして祈って行く中で不思議なように光が射すことがある。このダメダメな裁判官も心が全く変わったわけではないけれども（これはとてもリアルですね）裁判の道を開いてくれた、彼女のこれからも生きて行くそのための裁判が正しく開かれるようになった。そういう小さな奇跡の数々が自分の思いを超えてあちらからやってくることがある。少なくとも、神様は私のことを確かに覚えていて下さっている、だから信じてお委ねしよう、という信仰の心が備えられる。だから、信仰って楽しいですよ。悲壮的なことではない。この女性のように諦めないこと、逞しく大胆に信頼すること。そして、自分で自分を裁かないことです。自分を「神様」にしないことです。自分を「神様」にしてしまうから絶望してしまった時に行き場がなくなってしまうのだと思います。それが聖書の語る「罪」です。私たちは究極、自分で自分を保てるほど強くはありません。揺れ動く存在です。そして、この世の中はそんなに思う通りには変わってくれないでしょう。私たちは忍耐しなくちゃいけない時は続くでしょう。けれどもイエス様は、時に絶望に陥り、自らの弱さをさらけ出すような私たちに（弟子たちは皆そうでした）、いつも共にいるために、十字架にかかられる直前、パンを裂き、杯を分け与えて、これは私の体だ、これはわたしの血汐だ、わたしの愛を、私自身を血肉として生きよ！と、愛を持って呼びかけて下さり、今日も私たちの背中を押して下さっておるのです。「この地上にあって、あなたは逞しく生きよ」と。この譬え話は「弟子たちに」語られたとあります。ですからユダにもです。他の弟子たち皆にも、そして、今の私たちのためにも語られている主の愛の言葉だと思います。

「人の子が来る時、果たして地上に信仰が見出すだろうか」と主は言われます。「人の子が来る時」とうのですから、主は必ず来て下さるのです！神様のお約束は、真実なのですから、信じて祈りましょう！祈りこそ神様の憐みを信じること、聖霊のお働きに明渡して身を委ねることです。お祈り致します。

主イエス・キリストの父なる神様、あなたを大胆に信頼させて下さい。自分の思いの中に、また絶望の中に引きずり込もうとする力が働く時、あなたに祈ることが出来ますように。あなたは私たちと今日この時もつながっていて下さいます。あなたは無慈悲な裁判官ではありません。ご自分の命さえも投げうって下さり、私たちを生かして下さった愛そのもののお方です。あなたに結び付いて生きて行くその信仰をお与え下さい。絶望的状況の中にある方々を特にお救い下さい。主の御名によって祈ります。アーメン。